

福島県の歴史

はじめに

私たちが現在住んでいる、福島県の町は何時ごろから歴史の上に登場したのだろうか、福島という在所の名前がどうしてつけられたのだろうかという事を考えるのはとても興味のある問題だと思います。

そして、私たちの先祖は歴史の大波の中でどのように揉まれ歩んできたのだろうか。

遠い先祖たちの偉業を偲び、感謝し、将来に向かって町民一致して、更に発展させるために、今回『福島県の歴史』と銘打って、皆さんと共に考えていこうと思います。

どうぞ宜しく御協力、お願いします。

私たちは、歴史上の問題を考えるには、先ず何処かに残された資料(史料とも呼ぶ)がないかを問題にします。

そして残された資料を「ああでもない、こうでもない」とひねくり回して、その背景を考えてみるのが、とても大事だし、ロマンに満ちた魅力的な頭の体操になります。

しかし、我が愛する福島県の在所は、歴史資料に出てくるのはとても遅く、一五七五年・天正三年八月。織田信長勢が越前国の朝倉の残党を滅ぼし、次いで加賀国の能美、江沼両郡の一向一揆を制圧したときの史料に『能美・千代・赤井・福島道の場悉く伏す』という文書が『菅家見聞集』に見ることが出来るのが、最初の史料である。

更に、もう一つの文書は石川県立歴史博物館所蔵文書や磯村家文書によれば、慶長三年(一五九八年)、当時の領主であった丹羽長重が平井伊兵衛・磯村助六に福島県の土地、約二百石を知行として与えている事がわかる。

その他に金沢市の玉川図書館にある前田家の文書を保管している加越能文庫の書類を検索していた折に、前田藩政時代、村々の成り立ちを記したメモ書きの書類を見つけた時には頗る興奮したことであった。

メモには福島県と下の江の項に「元禄以前煮に村立て」とはつきり墨書きされているではないか。

元禄の頃村立とは可笑しいと思われるかも知れないが、元禄の頃は文化も爛熟し、生産技術も格段に向上した時代であった。

私たちの先祖は『職住近接』を振り捨てて、敢然として砂丘地に上陸したに違いないからだ。

前田藩は、住宅の面積も含めて徴税したし、何よりも砂丘地を開墾して桑や野菜を更に収穫しようと考えたのは当然の事であろう。

また、昔も今も排水の悪い西川を眺めて、その上に緑の木々を茂らせて浮き城のように、浮かんでいる福島県に、住民挙って上陸したに違いない